

- Maximilien Robespierre (1758—1794) 議会主義の革命指導者。François Guizot (1787—1874) 保守派の歴史家、政治家。ルイ・フィリップ統治の最終年間の内閣首班。
- 39 la brasse 旧フランス語では両腕をひろげた長さを意味した。
- 40 Alfred Darimon (1819—1902) 第二帝制下の自由党領袖のひとり。
- 41 Jules Ferry (1832—1893) 第二帝制下の自由主義反対派の指導者のひとり。のち第三共和制の政治家。
- 42 『労働者階級の政治能力』(一八六五年)より抜萃。(三浦精一訳「三書房」)
- 43 Eugène-Georges Haussmann (1809—1891) 第二帝制下のセーヌ県知事、首府の道路土木事業の創始者。
- 44 Eugène Pelletan (1813—1884) 第二帝制下の自由主義反対派の指導者のひとり。
- 45 表題は編者による。『書簡集』第八巻、二四七—二六六ページ。
- 46 Jules Favre (1809—1880) 第二帝制下、自由主義反対派指導者の一人。Emile Olivier (1825—1913) フォーゲルと同じ、のち一八六七—一八七〇年のいわゆる自由主義帝

- 制政府の首班。Pierre Marie (1795—1870) 一八四八年臨時政府の古参閣僚、国立仕事場の組織者。Jules Simon (1814—1896) 哲学者、自由主義政治家。
- 47 『労働者階級の政治能力』より抜萃。
- 48 一八四八年二月二十八日、市役所広場で同業組合の示威運動が行なわれたあと、臨時政府は「労働者のための管理委員会」をリェクサンブール宮に設けてルイ・ブランに主宰させ、彼はそこに雇主と労働者との代表を集めた。彼はまた社会問題の専門家たちにも訴えた。委員会は三月一日から五月十六日にわたって設置された。それは、労働組織計画を作成するにいたり、また諸社会法令を起草し、これは、のちに臨時政府によって公布された。
- 49 Robert Owen (1771—1858) イギリスの「ノートナム」社会主義者、初期の生産および消費協同組合の推進者。モラヴィア教徒とは、十五世紀中頃、ボヘミアに形成された教派、きわめて厳格な禁欲主義を特徴とし、世俗世界から隔離して愛と聖のうちに生きることが提唱した。Campbell (1568—1639) イタリアの哲学者「太陽の都」の著者。Thomas Morris (1478—1535) イギリス大法官、政治・社会的ロマン「ノートナム」の著者。Platon (429—347 av. J.C.) とりわけ「国家」および「法律」の著者。

ミハイル・バクーニン 1814—1876

バクーニンの見た一八四八年二月革命¹⁾

ロシアを亡命していたミハイル・バクーニンは、二月革命のさい、急ぎパリにたどりついた。

二月革命は勃発した。パリで戦闘が行なわれていることを知るとすぐに私は、いっどんなことが起こってもよいように準備するため、知合いのある人からバスポートを借り、パリに向かって出発した。しかしバスポートは不用であった。「パリでは共和制が宣言された」、これが国境で聞いた最初の言葉であった。この噂に私は身もわくなくするのを覚えた。鉄道が破壊されていたので、私は歩いてヴァランシエンヌに着いた。いたるところで群衆が集まり、熱狂の叫びが聞こえ、街路という街路、広場という広場、あらゆる公共の建物に赤旗がひるがえっ

ていた。鉄道線路は多くの地点で通行不能のため、回り道をしなければならなかった。共和制宣言後三日目の二月二十六日に、私はパリに到着した。道中はすでに何もかも、私を喜ばせるものばかりであった。

ヨーロッパ文化の中心であるこの巨大都市は、突如として野蛮なコーカサスと化していた。通りという通りのはほとんどいたるところにバリケードが山のように築かれ、屋根の高さにまで達していた。バリケードの上には石や壊れた家具の間で峡谷のグルジア人さながらに、絵のように色とりどりのシャツを身につけ、火薬で黒ずんだ、全身武装の労働者たちがいた。恐怖で痴呆になったような顔の食料品卸屋の者が窓から怖そうに外を見ていた。通りや大通りには車一台見えなかった。旧式のきざな連中、鼻眼鏡をかけ細身のステッキをもったいやらしい伊達男はみな姿を消し、それにかわってわがげなげな労働者たち、熱狂し勝ち誇る大衆が赤旗を振りかざし、

愛国の歌を歌い、勝利に酔っていた！

この果てしない歓喜、この有頂天のさ中であって、すべての人々はかくもやさしく人間的で、寛大で誠実で、控え目で、礼儀正しく、親切で精神的であったが、このような光景はただフランスで、それもパリだけで見ることのできるものであった。その一週間、私は労働者たちといっしょに、リュクサンブール宮殿からほど近いトゥールノン通りの兵営で生活した。この兵営の前には市の警察隊に当てられていたが、そのときには、ほかの多くの場所と同じく、共和軍の砦となっており、コインデイエール軍の兵舎に用いられていた。私は、労働者五百人の分隊を指揮していた友人の民主主義者に招かれて、そこへ留まることにしたのであった。

このようにして私は、朝から晩まで労働者たちを眼のあたりにし、研究する機会を得た。かつて、またいかなる所でも、他のどの社会階級の中でも、彼らの支配者たちよりも千倍も価値があったし、将来もつねにそうであろうこれら教養のない単純な人々におけるほど多くの気高い犠牲的精神、本当に人を感動させる誠実さ、物ごしや態度の上品さ、かくも英雄的な行為と結びついた快活さを見たことがなかった！

彼らについてとりわけ心を打つのは、規律の根深い本性である。兵舎には既成の秩序も法律も強制も存在するはずはなかった。しかしどんな正規の兵士にせよ、これら自由な人々ほど命令を正確にわきまえ、上官の希望を

かくもよく察知し、秩序をかくも厳重に維持しなかったであろう。彼らは秩序を要求し、指揮者を要求して、細心に情熱をこめて服従した。彼らは全期間中骨の折れる勤務につき、飢えに堪えながら、しかも愛想よいことに変わりなく、いつも快活であった。こうした人々、これからフランスの労働者たちが、彼らを理解し愛することのできる、彼らにふさわしい指導者を見つけたならば、この指導者は彼らとともに奇蹟を成し遂げることができたであろう。

……パリで過ごした月日は……魂にとって陶酔の一カ月であった。私だけが酔っていたのではなく、すべての者が酔っていたのであり、ある人々は気違いじみた恐怖に、他の人々は狂ったような恍惚や烈しい希望に酔っていた。私は朝四時か五時に起き、二時間眠っただけで一日中歩きまわり、あらゆる会議や集会、クラブ、行進、散策、デモに加わった。一言でいうと、私はすべての感覚、すべての毛孔で革命の雰囲気を感じ込んだのである。

これは始まりもなく終わりのない祭りであった。私はあらゆる人々に会い、それでいて誰にも会わなかった。というのは、一人びとりの個人は無数のさまよう群衆自体のうちに姿を消していたからである。私はあらゆる人々に話しかけたが、私の言葉も他の者たちのいった言葉も思い出さなかった。なぜなら、注意は一步ごとに新しい事件と新しい対象、思いがけない知らせに奪われて

いたからであった。

こうした一般的な興奮は、ヨーロッパの他の諸地方から伝わってくる情報によって、少なからず支持され強められた。人々はこのようなことだけを聞いた。「ベルリンで戦いが行なわれている。国王は演説のあとで逃亡した。ウィーンでも戦っている。メッテルニヒは逃走し、共和制が宣言された！ ドイツ全土が蜂起している。イタリアの人々はミラノ、ヴェネツィアで勝利を収めた。オーストリアの人々は恥ずべき敗北に屈した！ そこで共和制が宣言された。全ヨーロッパが共和制となっている。共和制万歳！」

全世界がひっくりかえされたかのようにであった。信じられなかったことがあたりまえのこととなり、不可能が可能となり、可能だったこと、あたりまえだったことが気違いじみたことになった。要するに精神状態は、誰かがやって来てこういったようなものであった。「神様が天国から追放されて、そこに共和制が宣言された」と。すべての人々がこれを信じ、誰一人驚きもしなかった。そして民主主義者たちだけがこの酔い心地を感じていたのではなく、むしろ逆であった。彼らはまっ先に酔いをさまし、仕事にとりかかり、あらゆる期待に反してあたかも奇蹟のごとくその手にはいった権力を、固めなければならなかったのである。

保守派と一日にして保守主義者自身以上に保守的となった王朝の反対派、要する旧体制を支持する人々はずべ

て、民主主義者にもましてあらゆる奇蹟、真実らしからぬことのすべてを考え、一二が四であると信ずることを止めさえもし、ティエール自身こう言明した。「もはやわれわれにはただ一つのことしか残されていない。それはわれわれを忘れさせることだ」と。この事実だけでも、フランスにおいては地方の全都市とすべての階級とが、いかに速かにまた全員一致で共和制を承認したかを説明している。

ジャム・ギヨームによるバクーニン

一八四八年革命のさい、短期間をパリで過ごしたあと、バクーニンは、眼のあたりに見た実例に強い感動を受け、ドレスデンの民衆蜂起（一八四九年五月三日）には、これに参加すべくその地へ赴いた。このため（蜂起はすぐ挫折に終わり、バクーニンは五月九日逮捕された）一八五〇年ザクセンで、ついでオーストリアで死刑を宣告され、ついにオーストリアからロシア政府に引き渡された。彼は故国で非常に長い苦しい囚われの生活を過ごした。その後一八六一年にシベリアからの脱走に成功し、ロンドンにたどり着いた。それはツァー帝国に対するポーランドの叛乱（一八六三—一八六四年）のあとのことである。なおバクーニンがアナキストになったのは、おそらく一八六四年の末、パリでブルードン——終焉問近の——に会ってからである。そのためここでは、生涯のこの転機にはじまるバクーニンの伝記を、ジャム・ギヨームによって述べることにする。

……一八六三年ポーランドの蜂起が起こったとき、彼（バクーニン）はそれを指導した活動家たちといっしょになろうと試みた。しかしロシア人部隊の組織化は失敗し、ラビンスキの派遣隊は成果をあげることができなかった。バクーニンは、スウェーデンの干渉を獲得する希望をいだいてストックホルム（ここで妻といっしょになった）に赴いたが、奔走は何一つとして成功せず、ロンドンに引き返さざるをえなくなった（十月）。ついで彼はイタリアに赴き、そこから一八六四年中頃スウェーデンへ再度旅行し、その帰途ロンドンとパリに立ち寄り、ロンドンではマルクス、パリではブルードンに再会した。一八五九年の戦争と一八六〇年におけるガリバルディの英雄的遠征との結果としてイタリアは、新しい生活にふみ出ようとしていた。バクーニンはこの国に一八六七年秋までとどまり、はじめフィレンツェに、のちにはナポリとその付近に滞在した。彼は、宣伝と、時機が来れば行動とを目的とする、革命家の国際的秘密組織の計画を構想した。そして一八六四年以来この秘密結社にいく人かのイタリア人、フランス人、スカンディナヴィア人、スラヴ人を集めることに成功し、それは「国際同胞団」もしくは「社会主義革命家同盟」と名づけられた。イタリアでバクーニンとその友人たちはとりわけマッツィーニ主義者との間に専心した。彼らは神と人民を標語とする強権主義的宗教的共和主義者であった。バクーニンはナポリで創刊された雑誌『自由と正義』に自

己のプログラムを展開した。一八六六年七月、彼は二年このかたそれにすべての活動を傾けてきた秘密結社の存在をゲルツェンとオガリョフに知らせ、そのプログラムを彼らに伝えたが、二人の旧友は「非常に眉をひそめた」と彼自身語っている。当時組織は、バクーニンの証言では、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、イギリス、ベルギー、フランス、スペインおよびイタリアに加盟者を有し、なおポーランドとロシアの人たちをもメンバーにふくんでいた。一八六七年、諸国のブルジョア民主主義者たち、主としてフランス人とドイツ人が「平和・自由同盟」を創立してジュネーヴで会議を招集し、多くの反響を喚起した。バクーニンは、いぜん民主主義者たちにはいくらかの幻想をいだいていた。彼はこの大会に赴き、講演を行ない、同盟中央委員会の委員となり、スイス（ヴヴェー近傍）に居を構え、翌年じゅう委員会の仲間を革命的社會主義に導こうと努力した。ベルンでの同盟の第二回大会（一八六八年九月）において、一八六四年創立の秘密組織のメンバーである数人の友人たちとともに、……同盟に明白に社會主義的な決議を票決せようとして企てた。しかしいく日もの議論のあと、革命的社會主義者たちは少数派であることがわかり、同盟からの分裂を宣言し（一八六八年九月二十五日）、同じ日に「國際社會主義的民主主義同盟」の名で新しい組織を創立し、その綱領をバクーニンが起草した。

この綱領は、起草者が一八四二年ドイツではじまる長年の発展の末に到達した見解を要約したものであって、とりわけこのように述べている。

「本同盟は無神論者たることを宣言する。それは、階級の決定的かつ全的な廃止と男女個人の政治的、経済的および社会的平等化とを欲する。それは、土地、労働用具が他のすべての資本と等しく共同所有となり、労働者すなわち農業および工業組合によつてのみ利用されうることを欲する。それは、現存の政治的強権主義的国家はすべて、それぞれの国において漸次に公益事業のたんなる管理機能に縮小され、農業ならびに工業における自由なる組合の普遍的連合のうちに消滅すべきものと認める」

その創立にあたって「國際社會主義的民主主義同盟」は、その一般規約を承認する「國際労働者協会」の一支部を形成しようとするものであることを言明した。

一八六八年九月一日付で、ミハイル・バクーニンとニコライ・ジュコーフスキーとが編集したロシア語の雑誌『人民の事業』の第一号がジュネーヴで公開され、「ロシア社會主義的民主主義の綱領」と題する綱領を掲載したが、これは数日後「國際社會主義的民主主義同盟」が採択した綱領と基本的には同じものであった。しかしこの雑誌は、第二号から編集がかわってニコライ・ウーティンの手に移り、彼はまったく別の方針を打ちだした。

「國際労働者協会」は一八六四年九月二十八日ロンドンで創立されたが、その最終組織が決定され、規約が採択

されたのは、ようやく一八六六年九月三日から八日にジュネーヴで開催の第一回大会においてであった。

バクーニンは一八六四年十月ロンドンを通り過ぎるおり、そこで一八四八年以来会っていなかったカール・マルクスの訪問を受けた。マルクスは、かつて『新ライオン新聞』が受け入れ、一八五三年にドイツのジャーナリストたちが再びひろめた中傷について話し合うためにきたのであった。当時マッツィーニとゲルツェンは、ロシアの要塞監獄に幽閉されていた被中傷者を弁護した。マルクスもその頃、イギリスの新聞『モーニング・アドヴァンティザー』でこの中傷に自分が無関係なことを一再ならず言明し、バクーニンは自分の友人であるともつけくわえた。彼はこのことをくりかえし語ったのである。

この会談の終わりにマルクスはバクーニンにインテリナショナルに加入するよう勧めた。しかしバクーニンは、いったんイタリアに帰ってから彼が話した秘密組織に献身するほうをえらんだ。インテリナショナルは、その当初、ロンドンの総務委員会以外では、ほとんどパリの相互主義労働者のグループによって代表されているにとどまり、のちに占めるにいたった重要性を予見させるものは何もなかった。インテリナショナルの組織に真に人々の注意が喚起され、革命行動の梃としてもは無視しえない勢力となったのは、やつとローザンヌでの第二回大会（一八六七年）と、パリでの二度の訴訟事件、およびジュネーヴでの大ストライキ（一八六八年）のあと

のことであった。ブリュッセルでの第三回大会（一八六八年九月）で、協同組合主義に反対して集産主義思想が提唱された。一八六八年七月以後、バクサーニンはジュネーヴ支部の一員として認められ、ベルン大会で「平和・自由同盟」から脱退してのち、ジュネーヴに定住してこの市の労働者運動に積極的に参加した。

たちまちにして宣伝や組織に強烈な刺激が与えられた。イタリアの社会主義者ファネリのスペイン旅行は、マドリッドおよびバルセロナにおけるインターナショナル支部の創立という結果をみた。フランス語系スイスの諸支部は連合を結成して「ロマンド連合」と称し、機関誌『エガリテ』を一八六九年に発刊した。スイス・ジュラ地方で運動を妨害する偽りの社会主義者に対する闘いが行なわれ、それはジュラ地方労働者大多數の革命的社會主義への加入をもつて終わった。バクサーニンは何度かジュラ地方に赴き、「協力の仮面をかぶった反動」とよんだものと聞っている人々を声援した。これがこの地方の闘士たちと結んだ親しい交わりの初めであった。ジュネーヴでも、本能的に革命的社會主義的な建築労働者と、選挙闘争に参加し、急進的政治家と相結ぶ時計製造や宝石貴金属細工の労働者、いわゆる「製造所」労働者との間の闘争が、バクサーニンのおかげで終結したが、バクサーニンは『エガリテ』誌で力強いキャンペーンを行ない、注目すべき一連の論文、「インターナショナルの政策」の綱領で、革命的分子の収めたこの勝利、不幸にし

て一時的に終わった勝利を説明した。フランス、ベルギーおよびスペインのインターナショナル支部は、フランス語系スイスの諸支部と一致して前進し、近い将来の協会の総会では、集産主義が大多數の票を集めるものと予想することができた。

ロンドンの総務委員会は、「国際社會主義的民主主義同盟」をインターナショナルの支部として認めようとしなかった。それは、この新しい結社は第二の國際的団体を構成し、それがインターナショナル内部に存在することとは組織破壊の原因になるであろうという理由からであった。この決定を下した理由の一つは、バクサーニンに対するマルクスの敵意にあり、この著名なドイツの共產主義者が、バクサーニンのうちに「インターナショナルを顛覆して自己の道具に変え」ようとする「陰謀家」を見たと思ったことであつた。しかしマルクスの個人的感情とは無関係に、インターナショナルのかたわらに第二の組織をつくらうとするのは、たしかにつまらぬ考えである。バクサーニンのベルギーおよびジュラの友人たちは、このことを彼に指摘した。彼は彼らの道理に応じ、総務委員会の決定の正しいことを認めた。その結果、同盟の中央書記局は、この組織の加入者たちと協議のあと、彼らの合意のもとに解散を宣言した。ジュネーヴで結成されていた地域的グループは、インターナショナルの支部に変わり、そのようなものとして総務委員会から承認された（一八六九年七月）。

バーゼルでの第四回総会（一八六九年九月六日—十二日）では、インターナショナル代議員のほとんど全員が共同所有に賛成した。しかし当時は彼らの間に二つの別個の流れのあることが確認できた。一つはドイツ人、ドイツ系スイス人、イギリス人の國家共產主義者であり、他はベルギー人、フランス系スイス人、スペイン人およびほとんどすべてのフランス人の間の反強権主義的または連合主義的もしくはアナキスト的共產主義者であつて、彼らは集産主義者という名をとっていた。バクサーニンは当然この第二の派に属し、それには彼とともにとりわけベルギー人のセザル・ド・パーブとバリのウージエース・ヴァルランが数えられた。

……一八六四年に創立された秘密組織は、一八六九年一月、内部危機の結果解散した。しかし、そのメンバーの多くは彼らの間の関係を維持し、その親密なグループにスイス、スペイン、フランスから若干の新芽が、とりわけヴァルランが加わつた。革命的友愛関係における共同活動のために結合した人々のこの自由な接近こそは、インターナショナルが表明した大いなる運動に、より多くの力と団結とを与えるにちがいないと思われた。

一八六九年の夏、マルクスのある友人がベルリンの『エガリテ』誌で、「バクサーニンはロシア政府のスパイであつた」という昔の中傷をむしかえし、リープクネヒトも多くの場合にこの主張をくりかえした。リープクネヒトが大会でバーゼルへ来たおり、バクサーニンは彼に名誉

審査委員会でその理由を説明することを求めた。委員会でこのザクセンの社會主義者は、バクサーニンをなんら非難したのではなく、ただ新聞で読んだことをくりかえしたにすぎないと確言した。委員会は全員一致でリープクネヒトの行動は犯罪的に軽率であつたことを言明し、文書による委員署名の声明書をバクサーニンに渡した。リープクネヒトは過ちを犯したことを認めてバクサーニンに手をさしのべ、バクサーニンはみんなの前で委員会の声明書を破り、自分の巻たばこの火で燃やした。

バーゼル大会後、バクサーニンはジュネーヴを去つてロカルノ（テッシン州）に赴いた。この決定は厳密には私的ないくつもの動機からであつて、その一つは生活費が安く、また翻訳の仕事のため静かに暮らせる土地におちつくことの必要からであつた。翻訳というものはペテルブルグのある出版者のためのものであつた（その手初めは一八六七年に出たマルクスの『資本論』第一巻の訳であつた）。しかしバクサーニンはジュネーヴを去つたことは、ロシアの亡命者ニコライ・ウーティンの策略につながる政治的陰謀を自由にめぐらせることになつた。彼は、ここで特別に述べる必要もないほど、インターナショナルで演じた忌むしい役割によってよく知られているが、その政治的陰謀は、数か月にしてジュネーヴのインターナショナル（支部）を混乱させ、そこで覇権をにぎり、『エガリテ』の編集権を獲得することに成功した。

マルクスは、バクサーニンに対する怨みとけち臭いねた

「人民国家」(リープクネヒトの新聞)のある通信員は、「バリの労働者は現在の戦争に無関心」であると書いた。バクーニンは人々が犯罪にも等しい無関心を、彼ら労働者に帰していることに憤慨する。彼は、彼らがドイツ軍

「人民国家」(リープクネヒトの新聞)のある通信員は、「バリの労働者は現在の戦争に無関心」であると書いた。バクーニンは人々が犯罪にも等しい無関心を、彼ら労働者に帰していることに憤慨する。彼は、彼らがドイツ軍

「人民国家」(リープクネヒトの新聞)のある通信員は、「バリの労働者は現在の戦争に無関心」であると書いた。バクーニンは人々が犯罪にも等しい無関心を、彼ら労働者に帰していることに憤慨する。彼は、彼らがドイツ軍

の侵入に無関心ではありえないこと、彼らはプロシア専制の武装隊に対抗して彼らの自由を絶対に護らなければならぬことを示すために、こう書いている。

「ああ！ もしもフランスが、革命的社會主義の旗を高くかかげ、労働の最終解放を世界に告示するドイツ、イギリス、ベルギー、スペイン、イタリアのプロレタリアートの軍隊に侵略されたならば、わたしはフランスの労働者にまっ先にこう叫んだらう。『彼らに向かって腕をひろげよ、彼らは君たちの兄弟なのだ。彼らと団結してブルジョア世界の残存する腐敗分子を一掃せよ！』だが、今日フランスの名譽を傷つけている侵入は、貴族制、君主制、軍國主義の侵入なのだ。この侵入に対して受身のままでいるとき、フランスの労働者は、彼らの自由を裏切るのみでなく、なお全世界のプロレタリアの大義を、革命的社會主義の聖なる大義を裏切っているのだ。事態と、フランスおよび自由の大義を救うために用いるべき手段とに関するバクーニンの思念は、その年九月、著者名を出さずに『現下の危機についてのあるフランス人への手紙』という書名で出版した小冊子に説明されている。

一八七〇年九月九日、バクーニンはロカルノを去ってリヨンに赴き、十五日に到着した。時を移さず、革命的蜂起を企てるため、彼を最も活動的かつ最も大胆なメンバーとする「フランス救済委員会」が組織された。この運動の綱領は、九月二十六日に赤色のポスターで公表さ

みです。つまり盲目にされて、ウーティンやジュネーヴの偽社會主義政治家たち、「単一会堂」の人々と恥ずることなく相結んで自分を卑しくし、同時に、ドイツの友人たちに送った「内密の通信」(一八七〇年三月二十八日)で、バクーニンを汎スラヴ主義派のスパイであり、年に二万五千フラン受け取っていると確言することによって、ドイツの社會主義的民主主義者たちの間で、バクーニンの声望を失墜させようとつとめた。

ウーティンとジュネーヴの彼の腹心たちとの陰謀は、ロンドン連合の二つの分派への分裂(一八七〇年四月)を挑発することに成功した。その一派は、フランス、ベルギーおよびスペインのインターナショナルとともに革命的政策に賛意を表明し、「労働者階級のブルジョア政府の政治への参加は、現存事態の強化以外の結果をもたらさない」ことを宣言した。しかるに別の派は「政治関与と労働者立候補を主張した」。ロンドンの総務委員会ならびにドイツの人々とドイツ系スイスの人々は、第二派(ウーティン派および単一会堂派)に味方し、一方フランス、ベルギーおよびスペインの人々は他派(ジュラ派)に賛成した。

バクーニンはこの当時ロシアの問題にまったく没頭していた。一八六九年の春すでに、彼はネチャーエフとつきあっていた。そのころ彼は、ロシアで農民の大規模な蜂起を組織できると思っていた。彼がロシア語で「ロシアの若き兄弟たちへ、若干の言葉」と題する檄文と小冊

子『科学と現下の革命の原因』を書いたのは、当時のことである。ネチャーエフはロシアに帰ったが、友人のほとんどすべてが逮捕され、彼の組織が壊滅したあと、再び逃亡しなければならなくなり、一八七〇年一月スイスに戻った。彼はバクーニンに、ロシアの革命宣伝に全面的に献身するため、すでにはじめていた『資本論』の翻訳を放棄することを強要した。……バクーニンはロシア語で小冊子『ロシア軍隊の士官たちへ』、フランス語で小冊子『ベルンの熊とセント・ペテルブルグの熊』を書いた。彼はまた新刊の『コロル』を数号刊行し、数カ月間大いに活動した。しかし彼はついにネチャーエフが自分をたんなる道具として利用しようとし、個人的独裁を確保するためイエズス会士的なやり口に訴えたことに気づいた。一八七〇年七月ジュネーヴで決定的な釈明がなされたあと、バクーニンはこの若い革命家と完全に訣別した。彼は自分の過大な信頼と、はじめはネチャーエフの野生的なエネルギーが喚起した感嘆との犠牲となつたのであつた。「何もいうことはない」と、バクーニンはこの決裂のあとオガリョフに書きおくれた、「われわれは見事なばかりの役を演じたのだ。もしゲルツェンがいたら、どんなにからかったことだらう、それもどんなに正しいことだらう！ ところで！ もうこの苦い丸薬を吞み下すほかにないし、それはこんごわれわれをもっと慎重にさせるだらう」(一八七〇年八月二日付)。

この間にドイツとフランスとの間に戦争が起こらうと

れ、それにはリヨン、サン・ティエンヌ、タラル、マルセイユの代議員の署名が載っていた。バクーニンは、他国人ではあったが、友人たちの署名に加わることを躊躇しなかったし、それは彼らと危険と責任とを分かち合うとしてであった。ポスターは、「国家の行政・統治機構が無効となった廃止された」こと、「フランスの民衆は完全に自己を取り返した」ことを宣言し、それについて連合を形成したすべてのコミューンに、フランス救済委員会を結成し、「フランス救済の革命公会を形成するため」県庁所在地の各委員会から代表二名を、リヨンにただちに派遣することを提案した。民衆運動の支持をえて革命家たちは市役所を手にいれた。しかしクリュセレー將軍の裏切りと、民衆が信頼を寄せた人々のうちの若干の者たちの臆病のため、この企ては失敗した。バクーニンは、共和国検事アンドリュエから逮捕状を發せられたが、首尾よくマルセイユにのがれ、そこでしばらく身を隠しながら新たな運動を準備しようとした。この間、フランス当局は、彼がプロシアから金をもらっているスパイであり、国防政府はその証拠をもっているという噂をひろめた。リープクネヒトの『人民国家』紙のほうでも、九月二十八日の運動と赤いポスターの綱領とに關してつぎのような数行を掲載した。「人はベルリンの出版所でビスマルクの計画にこれ以上役立つことはなしえなかったらう」

十月二十四日バクーニンは、フランスに絶望してマル

ていたことを示して、彼の暗い予測を一部打ち消した。しかしバリーの民衆のヒロイズムも、力尽き敗北したフランスを活気づけるには無力であるとはなかった。コミューン主義運動をひろめようとして地方の多くの地点でなされた企ても失敗し、勇敢に蜂起したバリーの人々も数の力で押しつぶされた。そしてバクーニンは、フランス国境に近いところにおくためジュラの友人たちの間に來ていたが（四月二十七日）、活動もなしえないままにロカルノへ帰った（六月一日）。

だがこんどは、もはや失望に身を委ねはしなかった。パリ・コミューンは、同盟した全反動勢力の猛烈な憎悪の的であったが、被搾取者すべての心に希望の火花を点じた。世界のプロレタリアートは、人間解放のためにその血をどっと流した英雄的民衆のうちに、バクーニンの表現によれば「現代のサタン、敗れはしたが和解はしない偉大な叛逆者」を迎えた。イタリアの愛国者マッツィーニは、パリとインターナショナルを誹謗する人々に声を合わせた。バクーニンは「インターナショナル員のマッツィーニへの回答」を書き、これはイタリア語とフランス語とで出版された（一八七一年八月）。そしてこの文書はイタリアに大きな反響をまき起こし、この国の青年と労働者の間に世論を動かし、これが一八七一年の終わる寸前に、インターナショナルの多数の支部を成立させた。第二の小冊子『マッツィーニの政治神学とインターナショナル』は、ここではじめた仕事の終結をなす

セイユを去り、船長が友人の友人であった船に乗り、ジエノアやミラノを経てロカルノに帰った。その夜彼は、革命運動に加わる希望をいだいてフランスにやってきたスペインの社会主義者、センティニョンにこう書きおくれた。

「フランスの民衆はもはやぜんぜん革命的ではない。軍国主義と官僚主義、全ロシア人のわが親愛なる主権者にして支配者たる皇帝の筈と同盟した、プロシア人の貴族的尊大とプロテスタント的偽善とが、ヨーロッパ大陸で何十年かわからぬ間にわたって勝ち誇ろうとしている。近い将来の解放というわれわれの夢はすべておさらばだ！」

バクーニン出發から七日後の十月三十一日にマルセイユで起こった運動は、彼の悲観的判断を確かにするものでしかなかった。バゼーヌ將軍降伏の知らせで市役所にうち建てられた革命的コミューンは、五日間しか持ちこたえることができず、十一月十四日以後はガンベッタ派遣の委員、アルフォンス・ジャンの手中に帰した。

ロカルノに戻ったバクーニンは、その冬中に物質的窮乏と暗い苦悩と闘い、孤独のうちに過ごしながら、『一フランス人への手紙』のつづきとしてヨーロッパの新たな情勢に関する説明を書き、これを一八七一年春『答のドイツ帝国と社会革命』という独特の書名で出版した。

三月十八日のバリー蜂起の知らせは、バリーのプロレタリアートが叛逆のエネルギーと精神とを少なくとも保持し

ものであった。そしてすでに一八六八年スペインへのフアネリの派遣によって、スペイン・インターナショナルの創立者となっていたバクーニンは、一八七一年マッツィーニとの論争を機に、イタリア・インターナショナルの創立者となり、プロレタリアートに対するブルジョアジーの支配のみならず、当時国際労働者協会の内部に權威原理をうち立てようとしていた人々の企てに対する闘いに、熱烈に乗り出そうとしたのである。

ロンドン連合の分裂は、もしもロンドン総務委員会がそれを欲したり、またもしもその手先のウーティンがあればど不誠実でなかったならば、あるいは和解に終わることができたかもしれないが、いよいよ悪化し、取り返しのつかぬものになった。バクーニンと彼の友人三名は、ジュラの人々に同感を表明したという理由で、ジュネーヴ支部から追放された。一八七〇—一八七一年戦争の終結後すぐ、マルクスの手先たちがジュネーヴにやってきて不和を再びたぎつけた。社会主義的民主主義国際同盟の支部のメンバーは、彼らの支部の解散を表明したことによって、その平和的意向の証左を示したのと思つた。しかるにマルクスとウーティンの一派は武装を解かなかつた。社会主義革命的宣伝・行動と称する新支部が、ジュネーヴでパリ・コミューン亡命者たちによって結成され、これに同盟支部の旧メンバーたちも加入していたが、総務委員会によってインターナショナル加盟を拒否された。インターナショナル大会のかわりに、マル

クスとその友人エンゲルスの率いる総務委員会は、一八七一年九月ロンドンにほとんどマルクスの腹心だけからなる秘密会議を召集し、それにマルクスは、協会の基本規約に反する権限を総務委員会に与えることによって、インターナショナルの各支部および連合の自主性を破壊する決議を行なわせた。その会議は同時に、総務委員会の指導の下に、「労働者階級の政治行動」なるものを組織することを要求した。

経済的地盤において資本制搾取と闘うために組織された諸集団の巨大な連合体であるインターナショナルを、マルクス主義およびブランキ主義の党派心の強い人々のちっぽけな団体に奪わせないことが緊要であった。ジュネーブの宣伝部に団結したジュラの諸支部は、一八七一年十一月十二日ソンヴィリエでジュラ連合を結成し、インターナショナルのすべての連合に、総務委員会の蚕食に抵抗し、その自主性を強力に取り戻すため連合に参加することを招請する回章を送付した。

「将来社会は」とその回章は述べている、「インターナショナルが与えるであろう組織を全世界にひろげること以外の何ものでもあるべきではない。それゆえ、われわれは、理想とするこの組織に可能なかぎり近づくことに心がけなければならない。彼らはどのようにして平等かつ自由な社会を強権主義的組織から発生させようとするのであるのか？ これは不可能である。将来の人間社会の萌芽であるインターナショナルは、今から、自由と連

合というわれわれの原理に忠実なイメージであるべきであり、権威と独裁に傾くいっさいの原理をその内部から排除しなければならない」

バクーニンはソンヴィリエの回章を感激をもって迎え、その諸原理をイタリアの各支部に普及することに重点をおいて活動した。スペイン、ベルギー、ヴェルサイユ反動にもかかわらず、フランスに秘密結社の形で再組織された支部の大部分、および合衆国支部の多数は、ジュラ連合と同意見であることを表明した。人々は間もなく、マルクスと彼に与した者たちの、インターナショナルに彼らの支配を確立しようとする企てが失敗したと、確信することができた。一八七二年前半に顕著なことは、「インターナショナルのいわゆる分裂」(マルクス『エンゲルス全集』第10巻)と題する小冊子として印刷されたマルクスの手になる「機密回章」が出されたことであった。そこでは、自主派もしくは連合派の主だった闘士たちが個人的に攻撃され、また名誉を傷つけられた。そして総務委員会の所業としてあらゆる方面からあげられた抗議は、「ロカルノの神秘的法皇」の指図でインターナショナルの破壊につとめている、「旧国際社会主義的民主主義同盟」のメンバーたちによって企てられた陰謀の結果といえ表わされた。バクーニンはこの回章にそれ相当の評言を加え、友人たちにこう書きおくた。「われわれをかくも長いあいだ脅かしてきたダモクレスの剣は、ついにわれわれの頭上に落ちた。それは本当は剣ではなく、汚物の

山というマルクス氏手馴れの武器である」

バクーニンは一八七二年の夏と秋をチューリッヒで過ごし、その地に彼の発意で、インターナショナルのジュラ連合を支持するロシアおよびセルビアの男女学生のはほとんどすべてからなるスラヴ支部が創立された(八月)。四月以来、彼はロカルノで、スイスに住む数人の若いロシア人たちと関係をもち、彼らを行動と宣伝の秘密集団に組織した。……ピョートル・ラウロフとの争いや若干のメンバーの間の個人的不和は、一八七三年チューリッヒのスラヴ支部の解体をもたらさざるをえなかった。

そうした間に総務委員会は、一八七二年九月二日に大会を召集することに決定した。しかし大会の場所にはハグをえらんだ。それは、総務委員会の方策にすっかり忠実な、融通のきく、あるいは架空の委任状を携えた代議員たちが多数ロンドンから来るのを容易にし、また遠方の各連合の代議員の大会参加を困難にし、バクーニンの参加を不可能にするためであった。新たに結成されたイタリア連合は、代議員の派遣を棄権した。スペイン連合は四名、ジュラ連合は二名、ベルギー連合は七名、オランダ連合は四名、イギリス連合は五名を派遣した。インターナショナルの真の代表であるこの二十一「二」名が、少数派の中核をなした。数は四十名だが、実際には自分自身を代表するにすぎない多数派は、マルクスとエンゲルスを首領とする徒党が指示したことを実行するよう、あらかじめ決定されていた。ここでわれわれが語る

必要のあるハグ大会唯一の行事は、バクーニンの追放であった。バクーニンは最終日(九月七日)、代議員の三分の一はすでに立ち去ったとき、賛成二十七票、反対七票、棄権八票で追放されたのである。五名からなる委員会が傍聴禁止で行なった取るに足らぬ調査らしきものによると、バクーニン追放を要求するためにマルクスとその仲間が提出した理由は、次の二つであった。

「バクーニン署名の規約案および書簡により、本市民は、社会的ならびに政治的見地において国際労働者協会の規約とはまったく異なる規約を有する、同盟(主権的民主主義)と称する結社をヨーロッパに創立することを企て、またおそらくそれに成功したことが立証されていること。市民バクーニンは、他人の財産を全部または一部横領しようとする卑劣な策略を用いたが、これはまさに詐欺の事実をなすものであること。しかも彼と彼の手先たちは、己れの契約を果たすまいとして脅迫に訴えたこと。私がさきに道徳的暗殺の企てとよんだのは、このマルクス主義的告発状の第二の部分であって、これは、バクーニンが『資本論』の翻訳に対し前もって受け取った三百ルーブルと、ネチャエフが出版者ポリアコフにあてて書いた手紙のことをあてこすっているのである。この悪罵に対してロシア亡命者の一団からだだちに抗議が発表された。これがその主要な一節である。

「ジュネーヴおよびチューリッヒ、一八七二年十月四日。——われらの友ミハイル・バクーニンに対し詐欺脅

喝の非難をあえて加えた者がいる。われわれは、彼らがわが同国人たる友人に加えた奇怪な非難の根拠としていふ事実について、ここで論議する必要はなく、またその時機ではないと思う。われわれはこれら事実をよく、とるにたらぬ細事についてまで知っており、そうすることが差しつかえなく、すぐにその真実を明らかにしなくてはならないであろう。今は、われわれの友人では少しもないが、現在ロシア政府の搜索の犠牲者であるため、われわれにとつて尊いもう一人の同国人に関する不幸な事情のために、そうするのをばはまれている。マルクス氏は、その敏腕についてはわれわれもほかの点ではとやかくいうつもりはないが、少なくともこの場合には計算を誤っている。誠実な心の人々はすべての国々で、おそらく、かくも野卑な陰謀、正義の最も単純な諸原則に対するかくも明白な侵害を前にして、ただ憤慨と嫌悪を感じるのみであろう。ロシアについては、われわれはマルクス氏に、こうした策謀はすべてつねに無駄であるうと保証することができる。そこではバクニン、中傷が傷つけるにはあまりにも尊敬され、また知られすぎている。……」(署名者八名)

ハーグ大会の翌日、九月十五日にサン・ティエエ(スイス・ジュラ)で別の国際会議が開かれた。それはイタリア、スペインおよびジュラの各連合の代議員とフランスおよびアメリカの両支部の代表者を含んでいた。会議は満場一致で、「ハーグ大会のいっさいの決議を絶対

に拒否し、そこで指名された新総務委員会の権限を決して承認しない」ことを宣言した。総務委員会はニューヨークに移されていた。イタリア連合は、八月四日リニエ会議での投票によって、サン・ティエエの諸決議を前もって確認していた。ジュラ連合も同じ九月十五日開催の特別会議でそれら決議を確認した。フランスの各支部の大部分も急いで全面的承認を伝えた。スペイン連合とベルギー連合もまたクリスマス週間中にコルドバとブリュッセルで開いた会議でこれら決議を確認した。アメリカ連合も一八七三年一月十九日の連邦委員会(ニューヨーク、スプリング街)の会議で同じことをした。またイギリス連合では、マルクスの二人の旧友エツカリウスとユングがいたが、彼らは一八七三年一月二十六日の会議でマルクスのやり口のために彼と訣別した。ニューヨークの総務委員会は、ハーグ大会で与えられた権限を行使しようとして、一八七三年一月五日、謀叛とぎめつけていたジュラ連合の「資格停止」を宣言した。このやり口は、ただ、当初中立の立場を守ろうとしたオランダ連合が保留の立場から離れ、一八七三年二月十四日にはジュラ連合の資格停止を認めない旨宣言して、インターナショナルの他の七連合に加わるといふ結果に終わった。マルクスと彼に忠実な少数のグループが、一八七三年後半に、真実をいっそう粗雑に歪めたもので埋めたパンフレットを『社会主義的民主主義同盟と国際労働者協会』という標題で出版したが、その結果は、盲目な憎悪

のこの悲しむべき産物を読んだ人々の嫌悪を、喚起するだけであった。

一八七三年九月一日ジュネーヴで、インターナショナル第六回総会が開かれた。ベルギー、オランダ、イタリア、スペイン、フランス、イギリスおよびジュラの各連合の代表がこれに出席した。ベルリンのラッサール派社会主義は、ハーゼンクレーフェルおよびハッセルマンが署名した、賛意の電文を送った。総会はインターナショナル規約の改正に当たり、総務委員会の停止を宣し、インターナショナルをもはや頭部にいかなる指導的権威をも戴かない自由な連合に改組した。

「協会を構成する各連合および支部は」と新規約(第三条)は述べている、「それぞれの完全な自主性、すなわちその意志にしたがつて組織し、外部のいかなる干渉も受けずに自己の物事を管理し、労働の解放に達するために従おうと欲する進路を自分で決定する権利を保持する」

バクニンは長年の闘争生活に疲れていた。牢獄は彼を歳よりも老いさせ、彼の健康は真実害われ、今では休息と隠退を望んだ。彼は、自由連合の原理の勝利によって再組織されたインターナショナルを見たとき、僚友たちと別れを告げるべき時が来たと考え、ジュラ連合の会員に宛て手紙を出し(一八七三年十月十二日に公表)、ジュラ連合およびインターナショナルからの脱退を受諾するよう頼み、さらにこうつけ加えた。

「わたしはもう闘うのに必要な力があるとは思われません。だからわたしは、プロレタリアートの陣営において助けにならずに邪魔物でしかありえないでしょう。だから、親愛なる同志たちよ、わたしは諸君に対する感謝と、諸君の偉大にして聖なる大義、人類の大義に対する共感とで胸も一杯になりながら隠退します。わたしは諸君の歩みのすべてを友愛の思いで気づかいつつあつてくれることをつづけ、諸君の勝利の一つ一つを喜び迎えるでしょう。死が来るまで、わたしは諸君のものです」

彼はあと三年とは生きなかった。

彼の友人であるイタリアの革命家カルロ・カフイエロは、ロカルノの近くに買った別荘で彼を手厚くもてなした。そこでバクニンは一八七四年中ごろまで生活し、ついに平穏と安全と相対的な安楽とを見出したこの新しい生活様式に、すっかり没入しているように見えた。だが彼は自分を革命の一兵卒と考えることをやめなかった。イタリアの友人たちが蜂起的運動を準備すると、彼はそれに加わるためボローニャに赴いた(一八七四年七月)。しかし運動は連絡を誤って失敗し、バクニンは変装してスイスに戻らなくてはならなかった。

……バクニンは一八七五年にはもはや彼自身の影でしかなかった。一八七六年六月、病いの苦しみをいくらかでも軽くしたいという希望をいだいてルガノを去り、ベルンに赴いた。彼は六月十四日そこへ着くと、友人で医師のアドルフ・フォクトにこういった。「ぼくがここへ

来たのは、君にまた元氣にしてもらうか、それともここで死ぬためなんだよ」……彼は七月一日の正午に息をひきとった。

私は何者か？

私は学者でも、哲学者でもないし、職業的な著述家でもない。私は私の生活の中で書くことはまれだし、強烈な確信が、私自信を公衆にさらすこといっさいへの、私の本能的な嫌悪に打ちかつことを強いたときにしか、書くことをしなかったのである。

では、私とは何者か？ 今この仕事を私に発表させようとしているものは何か？ 私は熱心な真実の探究者であり、そして、宗教的・形而上学的・政治的・法制的・経済的・社会的な、現在および過去のあらゆる醜行に関心を寄せている、特権的なその筋の代表、秩序の党派が今日でもなお人々を愚かに隷属させるのに役立つと主張している悪意ある虚構の、仮借ない敵である。

私は自由の熱狂的な愛好者であり、自由をその中でのみ人間の知性と尊厳と幸福とが発展し拡大しうる唯一の環境とみなしている。それは、実際には全員の隷属に立脚する幾人かの特権以外のいかなるものをも決して代表していない、永遠の虚偽である国家によって明らかにされ、与えられ、計量され、規制された、あの自由ではない。それはまた、ジャン・ジャック・ルソー派やその他

すべてのブルジョア自由主義派によって説かれた、個人主義的な、エゴイスト的な、卑俗な、擬制の自由、国家によって代表される全員の権利と称するものを各人の権利の限界とみなすあの自由、必然的につねに各人の権利のゼロへの縮減に到達する自由ではない。

そうではなく、私は、真にその名に値する自由を求める。それは、各人の中に潜在的な能力としてある肉体的・知的・精神的な、あらゆる力のまっただき発展の中で形成される自由であり、われわれ自身の本性にもとづく戒律がわれわれに指示する以外の制約を認めない自由である。したがって、適切に言えば制約はない。というのも、も、それらの戒律は、われわれのかたわらや上にいる、外部の何らかの立法者からわれわれに強制されたものではないからである。それらの戒律はわれわれに内在するものであり、肉体的にも知的にも精神的にも、われわれの全存在の基礎をなすものである。だから、それらの戒律に限界を見出すかわりに、それらをわれわれの自由の現実的条件および有効な理由とみなさなくてはならない。

私は、各人のこの自由は、限界に対するように他人の自由の前にとどまるどころでなく、反対にそこに自己の確認と無限の拡大を見出すものであると理解する。それは、全員の自由による各自の無制限の自由、連帯による自由、平等の中の自由、暴力とその観念的な表現以外のなにものでもない権威の原理に打ち勝つ自由、天上と地

上とのあらゆる偶像を打倒したのちに、あらゆる教会とあらゆる国家の廃墟の上に新しい世界、連帯する人類の世界を創設し組織するであろうような自由である。

私は経済的・社会的平等の徹底した支持者である。私はこの平等の外では、自由も正義も人間の尊厳も道徳性も個人の安楽も国民の繁栄も、虚言以外の何ものでもないとして知っているからである。しかも、自由、この人間の第一条件の支持者である私は、以上の平等は、決して国家の至高の保護的な行為によってではなく、コミュニティの中に自由に組織され連合した生産的提携組織の集団的所有と労働の自発的組織化によって、またコミュニティの同様に自発的な連合によって、世界の中に樹立されなければならないと考える。

これこそ革命的な社会主義者ないし集産主義者^{コレクティヴィスト}と、国家の絶対的な主導権の信奉者である権威主義的な共産主義者とを、特に区分する点である。両者の目的は一つである。双方の党派とも同様に、時勢の力によって各自に、全員に・また全員のための平等な経済的条件に不可避的に課せられている、集団的労働の組織化と労働手段の集団的占有にのみとづく、新しい社会秩序の創設を望んでいる。

ただ、共産主義者たちは、労働者階級、とくにブルジョア急進主義の助力をえた都市プロレタリアートの政治力の組織化と発展によって、目標に到達しようと考えているのにたいし、いっさいの曖昧な結合と同盟の敵であ

る革命的社会主義者たちは、反対に、断乎として労働者大衆の仲間となり、彼らの綱領をこごとく受け入れることを望む、自分たちの過去いっさいと縁を切った上流階級の熱意ある人々すべてを含む、都市とともに田舎の労働者大衆の、政治的ではなく社会的な、したがって反政治的な勢力の組織化と発展とによってしか、目標を達成できないと考えている。

そこから二つの異なった方法が生まれる。共産主義者たちは、国家の政治権力を奪取するために労働者の力を組織しなければならぬと考える。革命的社会主義者は、国家の破壊のために、もっと丁寧な言葉がお望みなら、国家の清算のために結集する。共産主義者は、權威の原理と実践の信奉者であり、革命的社會主義者は、自由をしか頼みとしない。前者も後者も、ともに迷信を殺し信仰にかかわらねばならない科学の信奉者であるが、前者は、それを強制することを望むのにたいし、後者は、確信を持った人間のグループが、より高い何らかの知性によってあらかじめ描かれ、無知な大衆に強制されたプランによってでは決してなく、自分たち自身の運動によって、自分たちの實際の利益に応じて、下から上に、自由に、組織し連合するよう、科学を普及することに努めるのである。

革命的社會主義者は、人類を幸福にするための多くの試みに、さらに自分たちの努力を加えようとしている、すべての学者と人類の後見者たちの深遠な知性の中より

も、大衆の本能的な渴望や實際の欲求の中に、ずっと実践的な理性や叡知があると考える。革命的社會主義者は、学者たちとは反対に、人類はかなり長い間、あまりに長い間、統治されるままになっており、人類の不幸の源泉はあれこれの統治の形態にあるのではなく、それがどういふものであるかと、統治という原理と事実の中にあると考えている。

これこそが結局、一方では部分的にアメリカとイギリスの社會主義者に受け入れられた、ドイツ派によって科学的に發展させられた共産主義と、他方ラテン諸国のプロレタリアートに受け入れられた、最終的な結果にまで広範に發展し推進させられたブルードン主義との間に存する、すでに歴史的なものとなった対立である。

神と国家²⁰

個人・社会・自由²¹

……人間は、ゴリラの状態から出発し、至難な過程を経てはじめて自己の人間性を意識し、自己の自由を実現するようになる。最初はこの意識も、この自由もいなくことはできない。人間は、野獣として、また奴隸として生まれ、その思想、言語および意志が生まれるのに必然的に先立って存在する社会の内部のみ、漸進的に人間化され、解放されたのであり、これがなされうるのは、ただこの社会の過去および現在のすべての成員の集合的努力のおかげであり、したがって社会は人間存在の基礎であり、出発点である。この結果人間は、周囲のあらゆる人々から補われることにより、また社会の労働と集合的な力のおかげでのみ、その個人的自由を、さらに人格すらをも実現するのであって、社会の外では、地上に住むすべての野獣のうち、おそらくつねに最も愚かで、最もみじめなものである。ただこれのみが自然的、論理的である唯物論者の体系においては、社会は人間個人の自由

を、縮小し制限するどころか、反対に創出する。社会は根、樹木であり、自由はその果実である。したがって人間は、各時代に自己の自由を歴史の初めではなく終わりに求めなければならない。そしてひとりひとりの人間個人の現実のまっただけ解放こそは、歴史の真の偉大な目標であり、至高の目的であるということが出来る。

自由と自我

……自由の唯物論的、現実主義的および集団主義的定義は……こうである。人間は、ただ社会の中で、また社会全体の集合的働きによってのみ、人間となり、自己の人間性を意識し実現するにいたる。人間はただ、そのみが地球の表面を人類の發展に適したすみかに変えることのできる集合的もしくは社会的労働によって、外的自然の束縛から解放される。この物的解放なくしては、何びとも知的・道德的解放はありえない。人間は、教育と知育とによってのみ、自己の本性の軛から自己を解放することができ、すなわち本能と身体の動作とをいよいよ發達した精神の指導に従わせることができる。しかし教育も知育も、著しく、もっぱらに社会的な事柄である。なぜなら、人間は社会の外では永久に野獣か聖者でしかないであらうし、このことはほぼ同じことを意味するからである。結局、孤立した人間は自己の自由を意識することはできない。人間にとって自由であることは、

自分が他の人間に、周囲のすべての人々に人間として認められ、考慮され、扱われることを意味する。だから、自由はなんら孤立的事実ではなく相互的反映の事実であり、排除ではなく、逆に結合の事実である。すべての個人の自由とは、すべての自由な人々、彼の同胞、彼と平等な人々の意識における彼の人間性または人間的権利の反映以外のものではないからである。

私はただ他の人々の前で、また他の人々に対してのみ自由に考え、自由に自分を感ずることが出来る。

……私は、私をとりまく男女すべての人々が等しく自由であるときにのみ、真に自由である。他人の自由は、私の自由の制限もしくは否定であるところか、反対にその必要な条件であり、確認である。私は他の人々の自由によってのみ真に自由となり、かくして私をとりまく自由な人々の数が増し、彼らの自由がよりひろがり、より大きくなればなるほど、私の自由もより広く、より大きくなる。私の自由の障害をなすものは、反対に人々の奴隷状態であり、あるいは同じことに帰着するが、私の人間性の否定を意味する人々の獣性である。なぜなら、もう一度いうと、私の自由、もしくは同じことをいえば、他の何者にも従属せず、すべての人々の同様に自由な意識を反映する私自身の確信のみにしたがって行動を決定するところに存する私の人間的尊厳、私の人権が、あらゆる人々の同意を得て戻ってくるときにのみ、真に自由であることができる。万人の自由によってこのように確

められた私の個人的自由は、限りなくひろがっていく。

国家と政府

……私は躊躇せずにいうが、国家とは悪であり、しかも歴史的に必然的な悪である。それは、遅かれ早かれ完全に消滅するであろうことが必然であるように、過去には必然であったし、人間の原始的獣性と神学的たわごとがそうであったように、必然だったのである。国家はけっして社会ではなく、社会の抽象的にして粗暴な一形態にはかならない。国家は、歴史上すべての国において暴力と強奪と掠奪との結合体から、要するに戦争と征服とに、諸民族の神学的幻想がぎっぎに創り出したものもろの神々が結びついて、生まれたのである。国家はその起源いらい、暴力と勝ち誇る不正とを神聖なものとして裁可してきたし、現在もなおそうである。

……叛逆は国家に対してははるかに容易である。というのは、国家の本性そのもののうちに、叛逆をひき起こす何かが存在するからである。国家とは権威であり、暴力であり、暴力の誇示、自負である。国家はこっそりしのびこむのではなく、意見をええさせようとするのではない。国家がかかわり合いになるときはいつも、ひどく不承不承にそうする。なぜなら、国家の本性は少なくとも説得することではなく、自己を押しつけ、強制するこ

とだからである。国家は、人々の意志の法的侵害者、自由の恒久的否定者としての本性を隠すため、どのように苦心していることか。国家は、善を命令するときでさえ、まさに善を命令するというそのことのために、善を傷つけ、価値を失わせる。命令はすべて自由の正当な反抗を刺激し喚起するからであり、善は、命令されるやいなや、真の道徳、たしかに神的でなく、人間的な道徳の見地、人間尊重と自由の見地からみれば、悪となるからである。

……搾取と政府、前者は統治の手段を提供し、あらゆる政府に必要な基礎ならびに目的をなし、政府は政府で搾取する権力を保証し合法化するものであって、両者は政治と称せられるものの全体の不可分な二つの項である。

それらは歴史の当初からまさしく、神政制、君主制、貴族制、さらに民主制さえもの諸国家の現実生活を形成してきた。十八世紀の大革命以前およびそれまでは、搾取と政府との緊密な関係は、宗教的、忠節的、騎士道的等もろもろの虚構によって隠されてきた。しかし、ブルジョアジーの粗暴な手が、しかもかなり透明になっていた被いのすべてを引き裂いてから、ブルジョアジーの革命的息吹きが、その背後で、教会と国家、神政制、君主制、貴族制がかくも長いあいだ安穩に恥辱を成しとげることができたいっさいの無益な妄想を一掃してから、ブルジョアジーが鉄床であることに飽いて鉄鎚になってから、彼らが近代国家を開始してからは、要するにこの宿

命的な結合が、すべての人々にとって発きだされた異論の余地すらない真実となったのである。

搾取、これは眼に見える身体であり、政府、これはブルジョア体制の心である。そしてわれわれがいま見たように、両者はこのように緊密な結合において、理論的かつ実質的な見地からみて、形而上学的観念論の必然かつ忠実な表現であり、個人の自由と道徳を社会的連帯の外に求める、あのブルジョア学説の不可避的な帰結である。

この学説の帰着するところは、幸福な選ばれたごく少数の人々が搾取する統治であり、大多数者が搾取される奴隷制であり、万人にとってはすべての道徳性とすべての自由との否定である。